1

【出題の意図と対策】

近年「読む」能力とともに、「話す・聞く・書く」能力の育成に力が入れられています。入試においては、「書く」能力を判定する記述式の問題とともに、スピーチ・発表・話し合いなど、「話す・聞く」能力を判定する会話形式の問題も頻繁に出題されています。会話形式の問題では、発言者それぞれの意見の主旨やキーワードとなる言葉を的確につかみ、発言の内容を正確に読み取ることが大切です。普段から人の発言などを注意深く聞き、すぐに頭の中でポイントをまとめる訓練をするように努めましょう。

【解答】

① **イ**
② 伺います
③ その先生は私にたくさんのことを教えてくれました。
④ 好きこそ物の上手なれ

【解説】

① ポイント《発言の内容を理解できるかどうか》
　Aの質問に対して、石田さんが「小さい頃から、ピアノを弾くことが何より好きだったからです」と答えていることから、加奈さんは志望理由について聞いたのだと考えられます。Bの質問には「忍耐力と集中力が必要」「手の大きさなどの身体的な適性もある」などと答えていることから、ピアニストの適性について聞いたのだとわかります。Cは「途中であきらめずに、その曲と真剣に向き合って練習することで、イメージ通りの演奏ができるようになる」という言葉からうまく演奏できないときのアドバイスについて、Dは「曲が作られた国を訪れたり、外国語を学んだりしたい」「聴きに来てくださった方に感動を届けられるようなピアニストになりたい」という言葉から今後の抱負について語っていることを捉えましょう。

② ポイント《敬語の知識があるかどうか》
　「聞く」の謙譲語には「伺う」「お聞きする」などがありますが、ここでは「決まった言い方の敬語動詞を使うこと」という条件があるので、文脈に合わせて「伺います」と書き改めます。

③ ポイント《文の書き換えができるかどうか》
　自分が主語で相手に何かをしてもらう場合は「もらう」、相手が主語で自分のために何かをしてくれる場合は「くれる」を使います。「私は〇〇に……してもらう」という文は、「〇〇は私に……してくれる」という文に書き換えることができます。

④ ポイント《語句の知識があるかどうか》
　「好きこそ物の上手なれ」は「人は好きなことには熱心に取り組むので、上達が早い」という意味を表すことわざです。対照的な意味を表すことわざとして、「下手の横好き（下手ではあるが、その物事を好み、熱心であること）」も覚えておきましょう。

2

【出題の意図と対策】

文学的文章（小説）の読解です。小説は、主人公のものの考え方や感性、その生き方などを通して、人間とは何か、生きることの意味は何かなど、人間にとって重要なテーマを読者に訴えかけようとするものです。ここでは八束澄子の『明日につづくリズム』を題材に、主人公たちの行動や、心の動きを読み取ります。小説を読むときには、できるだけ登場人物の立場に立って、その境遇や心情に寄り添いながら読むようにしましょう。

【解答】

① ⓐ とうとつ　ⓒ しっと　ⓔ たましい
② じゃけえ
③ **ア**
④ A 高らかに千波に向かって宣言した
　B 恵の心が離れていこうとしている寂しさ
⑤ 例 恵に嫉妬して、何か否定的なことを言ってやりたい衝動がおさえきれない状態。（36字）
⑥ **ウ**

【解説】

① ⓐ「唐突」は「突然」と似ていますが、「予期しないような言動によって違和感を覚える様子」を表す言葉です。

② ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》
　文章の冒頭の「千波、もう進路決めた？」という発言から、恵は中学校卒業後の進路について話したいのだと考えられます。理学療法士である藤田先生の人柄や仕事熱心な様子についても力説していますが、読み進めていくと、恵が本当に言いたいのは「うちもいつかは藤田先生みたいに理学療法士になって、人を励ましたいんよ」という将来の夢だとわかります。

③ ポイント《語句の知識があるかどうか》
　「心でつながってる」という表現や二人のやりとりから、千波と恵は非常に仲のよい友達同士なのだと考えられます。**ア**は「身体は別々であっても、心は同じであること」という意味で、夫婦や友達同士の心が固く結ばれている様子を表す言葉です。**イ**は「一つのことに集中して、他のことに気をとられないこと」、**ウ**は「他に心を向けず、ひたすら一つのことに集中すること」、**エ**は「文字や言葉を使わなくても、互いの気持ちが通じ合うこと」という意味であることから、最適なのは**ア**だとわかります。

④ ポイント《人物の心情を理解できるかどうか》
　ⓕの直前の「そんな恵がまぶしくて」という表現に注目しましょう。「そんな恵」とは、自分の夢について「高らかに千波に向かって宣言した」あと、上機嫌で「高らかに歌」っている恵を指しています。そのような恵の姿を見て、千波は固く結ばれていると思っていた「恵の心が離れていこうとしている寂しさ」に襲われ、「恵をすごく遠くに感じた」のです。

⑤ ポイント《人物の発言の理由を理解できるかどうか》
　恵の宣言を聞いている間に、千波の心に起こった変化を捉えましょう。千波は恵への「嫉妬」で「胸が不快にさわぎ立てる」のを感じ、「何か否定的なことを言ってやりたい衝動がおさえきれな」い状態になっています。そして、「え、チョコってメスじゃろ。サイテー」という発言のように、「誰に対しても、今は意地悪な言葉しか出てこな」くなっているのです。このような精神状態を押さえて、条件に合うようにまとめましょう。

⑥ ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》
　無邪気に将来の夢について語る恵とは対照的に、千波は恵に対して屈折した感情を抱いて悶々としています。最後の一文に「『恵、すごい！　がんばって』そう言えない自分が情けなかった」とあることから、千波は親友を心から応援できない自分の狭量さやふがいなさを感じて落胆していることがわかります。

3

【出題の意図と対策】

説明的文章の読解です。論説文は、あるテーマに関する研究内容やデータなどについて、筆者が考えを述べた文章です。ここでは、三井秀樹の『かたちの日本美』を題材に、茶道という日本の伝統的総合芸術について考えます。論説文を読むときには、その文章が何について書かれているかを理解し、そこから筆者がどういう結論や考え方を導き出しているかを読み取るようにしましょう。

【解答】

① ⓒ 誕生　ⓔ 裏側　ⓖ 心構（え）
② A 統合化
　B 総合芸術
③ 活用の種類 **オ**
　活用形 **キ**
④ **エ**
⑤ 和敬静寂
⑥ 例 茶室という大自然の見立ての空間に、茶事に必要な物を心を込めて準備し、亭主と客人が一期一会の心で対峙して、礼をつくしながら茶を飲む儀式を通して精神性を高めるという日本人独特の美意識。（90字）

【解　説】

① ⓔ「裏」は、横画の本数を間違えないようにしましょう。

② ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》
　第二段落に「茶を飲む空間として……菓子などそれぞれの分野が統合され、茶道という世界初の総合芸術が誕生した」とあります。また、第四段落で「こうした専門分野の統合化した究極の美の探求が、茶道という芸術の本質」だと述べています。これらの内容から、茶道が「もっとも日本的な美を追求した美術や芸道」だと考えられるのは、日本の伝統的な専門分野を「統合化」して究極の美を追求した、世界初の「総合芸術」であるからだとわかります。

③ ポイント《動詞の活用の知識があるかどうか》
「発し」の終止形は「発する」で、「〜する」という形なので、活用の種類は「サ行変格活用」です。また、「〜ます」「〜た」「〜て」などに続く形は連用形です。

④ ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》
「IT社会」について説明している第六段落に注目しましょう。「IT社会とは……映像や文字、声が同時にコミュニケーションできる……デジタル化社会を指す」「世界の裏側の国々の人とも瞬時にインターネットで情報を交換することができる」「デジタル技術を応用した芸術表現、メディアアートも今、注目を浴びている」とあることから、**ア・イ・ウ**は適当です。「IT社会は……これによって人間の精神性は何ら以前と変わらない」「デジタルメディアが高い精神性のひとかけもない単なるメディアの統合である」とあるので、**エ**が不適当だとわかります。

⑤ ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》
　最後から二つ目の段落に「侘び茶という茶道は……いわゆる茶道の倫理、『和敬静寂』の精神の上に成り立った総合芸術なのである」とあります。「倫理」とは、「行動の規範となる道徳観や善悪の基準」のことです。

⑥ ポイント《文章の内容を理解してまとめられるかどうか》
　最終段落で、筆者は千利休が茶室に一輪の椿を生けることによって豊臣秀吉を驚かせたという逸話を紹介し、「茶室という大自然の見立ての空間に、喫茶を通して精神性を高める日本人独自の美意識が、茶道という伝統的総合芸術を育んだ」と述べています。最後の四段落の内容を参考にしながら、「千利休の『侘び茶』の美意識」とは、「茶室という大自然の見立ての空間」に、「茶事に欠かすことのできない『物』を準備し、心を込め」、「亭主と客人が一期一会の心で対峙」して、「礼をつくしながら茶を飲む儀式」を通して「精神性を高める」という日本人独特の美意識であることを押さえて、指定の字数に合わせてまとめましょう。

4

【出題の意図と対策】

　古文とその解説文の読解問題です。古典文学は、日本人の感性や独特の文化を創り上げる礎となった貴重なものです。ここでは、『枕草子』について、西村亨が解説を書いたものが題材になっています。古文は、かなづかいや表現法が現代と違い、難解なものに感じられるかもしれませんが、作品を通して、古人たちの心に触れてみましょう。

【解　答】

① 例　草原にたたえている沢水が、人が歩くにつれてとばしりをあげる（29字）

② とらえて

③ **ア**

④ A　人間関係、恋愛生活
　B　山里の自然

【現代語訳】

　五月の頃などに山里に（牛車で）出歩くのは、とてもおもしろい。草の葉も水もたいそう青く一面に見渡されるのに、表面はさりげない様子で、草が生い茂っている所を、そのままどこまでも、まっすぐに（牛車を進めて）行くと、下には何とも言えない（きれいな）水が、深くはないけれど、（供をする）人などが歩むにつれて、水しぶきとなってとび上がるのは、とてもおもしろい。
　左右の（人家の）垣根にある何かの枝などが牛車の人が乗る部分などに入ってくるのを、（車内で）急いでつかまえて折ろうとするときに、すっと（車が）通り過ぎて（手から）外れてしまうのは、とても残念だ。蓬の、牛車（の車輪）に押しつぶされたのが、車輪が回るにつれて、（顔の）近くまで香ってくるのもおもしろい。

【解　説】

① ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》
　まず、『枕草子』の原文を読んで、清少納言は「草葉も水もいと青く見えわたりたるに……人などの歩むに、走りあがりたる」様子を見て、「いとをかし」と感じていることを押さえます。解説文の内容と照らし合わせると、「草が青々と茂っているように見える草原に沢水がたたえていて、人が歩くにつれてとばしりをあげる」様子なのだとわかります。

② ポイント《かなづかいの知識があるかどうか》
　歴史的かなづかいの語頭と助詞以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」に直しましょう。

③ ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》
　解説文の第一段落に、「京の町中に住んでいる人々（＝王朝びと）」は「近代的な、文化的な生活を体験している自分たちとは別の、淋しく、人気を離れた生活、不自由で不足がちの生活、それでいて何か精神的なものを感じさせる、そんな内容をこの言葉（＝「山里」という言葉）の背後に感じている」とあります。また、ⓒの直前に「淋しい生活、淋しさに耐えている生活に一つの趣味生活の理想を感じている」とあることからも、王朝びとは山里の淋しくて不自由な生活に憧れを抱いていたのだと考えられます。

④ ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》
　「その淋しさ」とは、直前の山里の「冬の淋しさ」を指しています。最終段落で「人の訪れの絶える意味の『離る』と草木の『枯る』とをかけている」「山里の淋しさは人間関係、恋愛生活の上での淋しさであり、それに山里の自然の淋しさが重ね写真のように複合している」と述べていることから、「冬の淋しさ」とは、これら二つの淋しさを重ね合わせたものだとわかります。